

もづくの時期は3月～5月頃で各沿岸の岩盤、砂礫、貝殻等に着生し、量も多いようであるが、利用者が皆無で其の儘放置の状態である。戦前（昭和15年頃）静岡縣人吉岡氏が具志川村大原で産蔵もづくとして産詰して日本向け輸出したそうだが（量は不明）現在は放置の状態で堆豚の飼料としているようである。

## 結 び

久米島は資源に恵まれているが専業家が仲里村真治に居るのみで、具志川村又は磯間あたりの漁者は殆んど兼業者である。採貝業者にしても、5名居るようであるが真治漁者が転進的に採捕している。現地に専業家が居ないのは遺憾である。

尚うに、なまこの利用面についても無関心である。

なまこは只一部の人が煮付程度として使用し、「うに」と共に水瓜の肥料程度としている。尚もづくは全然利用がなく其の儘放置している現状である。今後これ等の加工利用面の開発により豊富の資源を利用し、生産を増すことにより村民の福利を増大することが出来ると思考される。

今回の調査は暴風が2回も連発したため、其の余波のため、相俟時化て思うように調査が出来なかつたことは遺憾である。

## 2. 大宜朱村に於ける資源調査

### 1. 調査場及期間

場 所 大宜朱村沿岸地先、リーフ並塩屋崎

期 間 1958年6月25日～6月27日 3日間

1. 調査方法 舢舨使用、漕り漁夫2名、調査員2名、水鏡及潜水

### 1. 採取調査

調査概要（調査地点及航跡は別紙略図で示す。）

調査点A、B（大宜朱村安根部落地先水深3尋～20尋）

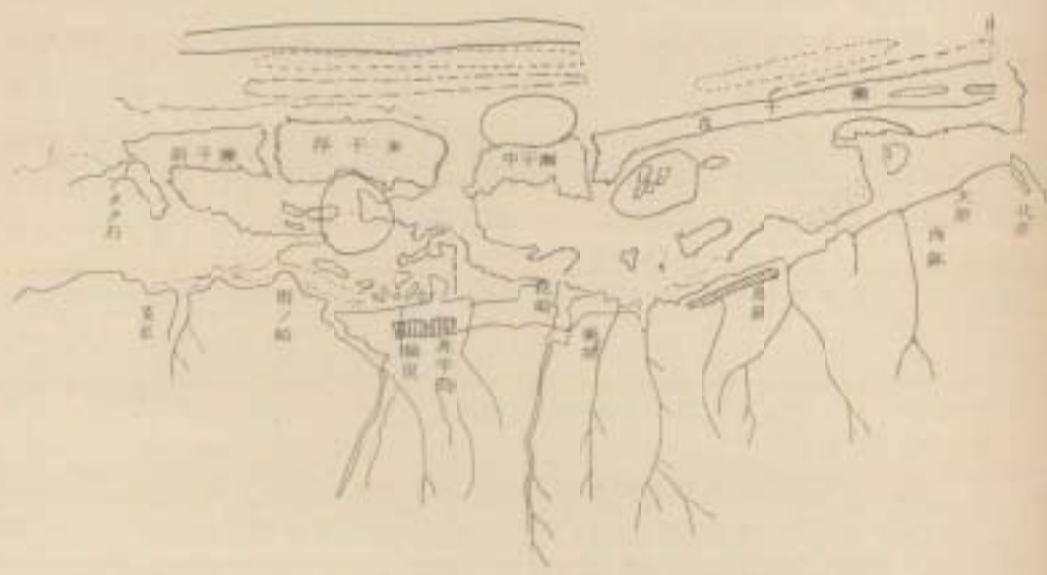
A 生産物の分布、底質海流の調査（生物の分布並に底質に就いての別紙略図で示す。）

陸地地勢は地勢素と石花糖よりなり、北部及離島は多少の礫層（水成岩？）を見ると山丘は高からず起伏甚しく平野河川を欠き沿岸は屈曲し断崖が多く各島は僅かに石花糖により挽曲して俗に「イノウ」と称し環状

凡例

圖說

- 高麗土 —
- 夜光土 ○
- 玉泉、紅樓宮
- 梅人草 ○



をなす。海底は泥土砂礫を見受け殆んどが珊瑚礁に被われ北部の一部と北西の小岐、八電山群島の一部及尖閣列島より台嶺に至り其の海底に淺層を見受ける様である。

海流に就いては大正元年の大村八十八氏の記述に依ると本島の位置たる東より西に向つて進行する黒流に並行し「ヒリッピン」台嶺の東部に突転して流走するもりの激激なるを以つて遠く沖合に於いては干満潮の別なく数日或いは数十日間一定方向に流歩し而も其の速度時々急激なるを以て特約の如く沖合漁業者は行術不明となること少なからず、又本島西北部に於いては離島多く、遠く沖合に出ざれば一定の方向に急行する海流なきも東南部に於ては海岸を走る沖合僅か1里内外の所にも此等の海流あり、其の方向は時期又は天候により一定せず、南部に於いては周年概して東北流が多い。以上は「沖縄島水産一般」の参考文献によるものである。

#### ㊦ 海流の調査

本島西北部は國領村辺戸岬より奥間、大宜味、運天の各沿岸地先を経て備前岬の間は湾曲をなし特に大宜味、運天間は内湾状で其の間古宇利陸我地、奥武島、宮城島を控え琉球海、鹿名湾と入込んでいる。

潮流は概して春夏の候は北東流が多く秋冬季には西流が多く多少小岐間の流れの差異はあるも本島沿岸は小丘陵をなし、村落に河川を控え特に雨季には氾濫をなす。

本調査地域の潮流は本島沿いに傾斜状をなせるも、深所沖合に流れているように思われる。

#### ㊧ 底質調査（水鏡及潜りによる）

調査地点は安曇郡落地先で沿岸は珊瑚地帯少なく二尋線迄は岩礁（珊瑚）土に砂利混りの砂泥地で急な傾斜をなし深所（十尋以上）で北西或は沿岸に沿ひ「茅打パンダ」に至り一部は古宇利島に示し其の間底一本釣の好漁場のようにである。

尚海外海に關する深所は平均な斜面をなし底質は殆んど岩上に砂利混り地帯を見受けるようである。

#### ㊨ 底質調査

ジュロモク（濁）

ミル（緑）

ヲツバモク (揚)	サキブトミル (鯨)
アミジダサ (カ)	トサカノリ (紅)
ウミウチワ (カ)	イノノバナ (カ)

(ロ) 貝類及び甲殻類

今回は舳舟を使用し三として藻類特に紅藻類の採取調査が目的なるため浅海の貝類並に甲殻類の採取調査は出来得なかつた。採取調査に依れば「えび類」「かき類」「たかせ貝」の採取が主なようである。

(ハ) 棘皮動物 (水鏡による舳舟上の調査)

ナマコ	ジヤノメナマコ
クロナマコ	ムラサキウニ
トラフナマコ	バアンウニ
フジナマコ	

(ニ) 魚類 (漁民より贈取り調査)

ヒメダイ	平鰭
カワバギ	フダ類
アカムロ	キビナゴ
ダツ	ケンククダイ
サワラ	タマモ
キダイ	クロダイ
イトヨリ	クチビダイ
ヒメジ	

(ホ) 其他

イカ類	イルカ
タコ類	ゴンドウイルカ

B 潜水調査 (調査地点ヨロ)

潜水夫 (滑り) は日本々士 (長崎県) で天窓の採取に経験のある宮城仲助兵に調査採取を御願ひした。

沖程では有用藻類中、紅藻類は其の類及び生産量が極めて少なく主に「キリンサイ」「ツノマタ」「海人草」「イギス」等で現在利用甚盛され其の他「つくしあまのり」「あみぐさ」「はなふのり」「みなみふのり」「とさかのり」「おほおごのり」「とげのり」「いそのはな」「はなやなぎ」



等が知られているが未だそれらの着生場所、棲殖場所及び生産量については不明の所が多い。是等紅藻類の繁茂時期は3月～5月頃の春先に多く調査採取点<sup>○</sup>は13号線で現在「とさかのり」が着生し、磯層斜面に其の附着を見受ける所で6月現在は得藻類がはびこり採取困難のようである。其の生産量に就いては不明であるが同地点を本島沿に「茅打パンタ」に至る石線は其の底質が略々同様であると思われるので繁茂期には或るいは其の生産も可能と思う調査採取点<sup>○</sup>は16号線で前記同様磯層斜面地帯で潜水には約6斤位の錘を使用して行った。

同地域は「いそばな」が主で原藻20種以上に達し着生しているようで同種のもは古宇利島北岸一帯或は屋敷地島北岸の採所にも着生をなし時季的な繁茂をなし、其の生産量も調査不明である。

尙其記「沖縄県水産一般」によれば今帰仁近海に天草のあるを以て、これを採集して羽地村に売出すものありと記述するは或は此の「とさかのり」又は「いそのはな」を指すのか調査の必要があろう。

#### □ 調査点<sup>○</sup>4 (塩屋崎、宮城島地先浅海)

##### 1. 生物の分布、底質、潮流の調査

塩屋崎は白浜、大保、田港の村落に囲まれ舟口には宮城島を遶つて舟内は舟かで後方は大保大川を控え阿賜に小高き山丘を見る。

山奥水明の郷は北部観光の勝地と知られ又舟内には「宮城新昌」氏によりかさ養殖が行われ其の茂の配置は美観を添えている。

##### (1) 潮流の調査 (略図参照)

宮城島は舟の水道口に位置し流速の最も激しく潜水調査にも困難を来した。同地域は潮の満干に依つて部分的な差異はあると思われるが概して水道口においては潮向の差はなく、又採所で4号を示す海溝状になっている。

調査点<sup>○</sup>は宮城島より津波沿岸に至る珊瑚礁地帯で潮に浅広く津波地先で2号位で潮の流れは環礁沿に外海に連するものと思われる。

##### (2) 底質調査 (水鏡及び潜水による)

調査点<sup>○</sup>宮城島の北西方で附近は砂利混りの砂質で2号内外を示す。舟沖合深所は舟と泥質の複である。調査点<sup>○</sup>は前述の通り塩屋崎の水

茅  
打  
山  
丸



道口を控え底質は中央部が珊瑚礁土に砂利多く流れが強いため常に洗われて居るように思われ有線部落地先は砂丘をなす。

(3) 高内の調査は養殖部で行なわれているので詳しい調査は行なわなかった。

(イ) 藻類

トゲノリ (紅)	ウチワサボテンダサ (緑)
ジョロモク (褐)	ヘライワズタ
ラツバモク (褐)	イギス (紅)
アミダサ (褐)	オホスゴノリ (紅)
ミル (緑)	ヤリンサイ (紅)
ヤキブトミル (緑)	マクリ (紅)

(ロ) 貝類及び甲殻類 (水鏡に依る調査)

カヤ マアナゴリ 其他前記に同じ

(ハ) 刺皮動物 (水鏡に依る刺舟の調査)

ナマコ	ジャノメナマコ
クロナマコ	ムラサキナマコ
トラフナマコ	スナヒトゲ

(ニ) 魚類 (魚類については前記同様)

(ホ) 其他

甲イカ、海亀類

B 潜水調査 (調査地点ロd)

有用藻類 (紅) としては前記同様其の繁茂期は5月～6月頃で調査点ロでは主として「イギス」「トゲノリ」「オホスゴノリ」等が採取、自家用程度に食用又は養殖餌料として使用され其の生産量についても不明の様であるが時期的な繁茂は見受る様で利用価値を講ずれば採藻としても将来有望であろう。

調査点dは水道ロ一帯に現在「ツノマタ」が自然繁殖をなし相当量に達するとの話であるが殆んど其の利用がなされず放置の状態にある。

夏季「海龜」の来遊と共に是等藻類が喰い荒されているとのことであつた

C 其他の調査 (本所資源調査要項に準ずる)

(イ) ナンジャダイ (うぶみー)

現在本部漁協の餌料専用船3隻が屋我地、古宇利部落地先に碇泊し餌料の採捕にあたっている。1日1隻当り100斤程度で餌料を捕っているようである。

ロ) 每人草、つのまた

每人草に就いては隣村の平地村では政府補助で現在繁殖をなし、4月頃には1斤当り30円の安値迄に取引されたことであるが同地域でも魚類の害がなければ宮城島一帯にも繁殖地が見受けられる。

「つのまた」前述の通りで自然繁殖を見受けたが其の利用者が少なく、放置され前記同被害を受けている状態である。

リ) 繁殖かき

かきに就いては増殖部で詳しく調査してありますので概略生産高をあげて見ることにします。

1955年度	投付 抜身量	3,168ダース 319貫
1956年度	投付 抜身量	6,194ダース 200貫
1957年度	投付 抜身量	1,257ダース 127貫

尚現在繁殖されている方法は波状式(地元で)と呼ばれて「ラム種」2個を1組として行なわれている様である。

附着器	20本(平均)
現在数量	150万個

ハ) とさかのり

同属類に就いては現在繁茂期になれば漁夫2名で舟1杯は楽に採取可能と云うことである。

チ) び

本調査は充分とは云えないが紅藻類の着生場所を盡めた事については略々目的を達したが、時期が遅いため広範囲な着生場所並びに接種場所又は生産量についても詳しく再調査の必要がある。

同村は専業者は少なく殆んど兼業者が多く1955年の調査に依れば専業者9、兼業者46となっている。